

【取扱い厳重注意】

○質問者 武黒さんなんかは、携帯でつながらないわけですよ。どうやっていたのですか。

○細野大臣 それは、下の人が電話をしていたか、PHS はつながったのかな。中では全然つながらなかったんですよ。外に行って情報を取って戻ってきて、一々報告していましたね。

○質問者 そうすると、東電の人間がそういうことをずっと情報を取って来て。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 それで、結局9時過ぎからそういうことをされているみたいですが、10時くらいまでの間に結局線量が高いということで、2班、3班あたりまでいくと上手く行けずに引き返してくるような形になってしまって、結局問題としては、中の線量が高いので現場に行って開けるのはちょっと難しいということで、その後、もう外からコンプレッサーで圧を送って開けるしかないのではないかとというようなことなんかには走っていったみたいなのですか、そういうその具体的なオペレーションというか。

○細野大臣 全部聞いていました。

○質問者 そういうのも入っていたのですか。

○細野大臣 聞いていました。当時は、2つ弁があって、バルブが2つあって、1つ目のバルブは手動で開いたのではなかったですか。2つ目が電動で開かなくて、それをどうやって開けるかでまたやっていたんですよ。いろいろ方法を考えますとか言って。

○質問者 それは、もうリアルタイムでそういうような情報は入ってきていたと。

○細野大臣 はい。入っていました。

○質問者 その頃というのは、要するに作業状況が全く分からないからいら立ちがあるという感じでもないんですか。

○細野大臣 途中から入るようになってきたんですよ。初め、空白の1時間くらいがあるんですよ。3時から4時半とか5時頃までか、ちょっと正確には分かりませんが、その間になぜ入らないか分からなくて、躊躇していたのかもしくは入れられなかったのがちょっとよく分からなかったです。それからは、決死隊を作ってでもやってくれと。

○質問者 それ以降は、比較的情報が入っているということなんですか。

○細野大臣 そのベントの件はですね。

○質問者 注水の方の情報なんかは入ってきていましたか。要するに、消防車を使って入れているということは。

○細野大臣 それは入っていました。

○質問者 当然最初は、防火水槽なんかの真水を入れているみたいなのですが、それで結局水が欲しいということでいろんなところから水の要請を、東電の吉田所長や本店なんかでされているようなのですが、そういう水の手配なんかには細野大臣は関わられて、例えば自衛隊なんかも給水車を18日くらいに送っているみたいなのですか、そういう水の手配なんかに関与されたことというのはございますか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 当時私がやったことは、東電から要請があったら全部それは自衛隊の秘書官とかに伝えたりとかして、やってくれということは全部やっていました。電源車のこととかもそうですけれども、別に自分で大臣に電話するのではなくて、秘書官を通じてでしたけれども、それはもう東電に言われたことは全部やっていました。ちょっとこれはオフレコにさせていただいた方が、ここだけ止めていただけますか。

(以下、レコーダーデータ③)

○質問者 東電に決死隊を作れというふうに、これは具体的には武黒さんなんかにおっしゃられていたということになるんですか。

○細野大臣 そうですね。

○質問者 そのときの武黒さんの反応は、作業員たちの身の安全であるとか、そういうことなんかも考えなければいけないのですぐにはできないというような反応だったんですか。

○細野大臣 いや、一瞬躊躇はあったと思いますけれども、作ってでもやりますと彼は言っていました。多分、現場もすぐに作っていたんだと思います。

○質問者 ただ、それがなかなか遅々として進まないという現状から、ためらっているのではないとか本当に行くのかと不安になってこられていたということなんですか。

○細野大臣 社としてためらっているというよりは、民間人がそこで本当に行けるのかなというふうに思ったんですよ。

○質問者 できませんとか、そういうようなやり取りがあったということではないと。

○細野大臣 だから、初め線量が上がってきたので行くのが難しくなりましたと言うから、そんなことはあり得ない、だったらもっと早く行けたはずではないかみたいな話になって、決死隊を作っても行ってもらわないとこの事態を乗り越えられないだろうという話になったんです。

○質問者 武黒さんがそれを本店の方に伝えているかどうかというのは分かりますか。その決死隊を作っても行けというふうに、例えば目の前で電話をかけてもらったとか。

○細野大臣 それはしてませんね。つながらなかったの。

○質問者 そうすると、恐らくは席を外してそのあたりのことは言っているだろうという。

○細野大臣 伝えてたと思いますけどね。逆にどうなんですかね。

○質問者 恐らく伝わっているからああいいう3班体制によって、その後の3班体制の情報は入ってきていたんですよ。

○細野大臣 入っていました。

○質問者 では、恐らく伝えてくれているんだとは思いますが。

○細野大臣 そのときに、初めはペントもやるということになっていたから、では東電は自分で判断してそれでオーケーだったんですけれども、途中でもしかしたらこれは躊躇しているのではないかというので、ある時間帯から指示に切りかえたはずで、そこも含めて決死隊を作ってもやれというのは、これはもう政府の意思だと。絶対に外せない政府

【取扱い厳重注意】

の意思だというのは伝えようとはしていましたから、常識的に考えると伝えていたんでし  
ょうね。

○質問者 そのときは、海江田大臣なんかも [REDACTED] おられていたと。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 班目さんなんかもおられたんですか。

○細野大臣 いましたね。

○質問者 そこでそういったやり取りがあって、ベントがその後途中までやって、なかな  
か途中からその先に進まないというところで、結局これは 14 時から 14 時半くらいまで時  
間がかかっていますよね。その間もずっとベントの情報なんかは逐次入っていましたか。

○細野大臣 そうですね。その手動のものが開いたのは、それでも割と早かったのではな  
かったですか。

○質問者 一番最初のは、9 時 15 分くらいに恐らくやっていると思われるのですけれ  
ども、その後の次の AO 弁の方が。

○細野大臣 こちらが開かなかったんですよ。そうです。ただ、最終ベントの確認は確  
かに午後なのですけれども、もうちょっと早い時間に圧力が抜けたというのでベントがで  
きたというようなことが入ったんですよ。

○質問者 中操から残圧を期待して入れてみたら、ちょっと線量が上がったと。

○細野大臣 結局外からやっていたよ。どうやってやったかは、そこはちょっと私  
も技術的なことなのでよく分からないのですけれども、外からやってみると。電動のもの  
も持って行ったら、それが機能しなくて開かなかった、外からやってみると言うので、外  
からなんてできるのかな、外から開くなら、初めから外からやるだろうと思った記憶があ  
るのですけれども、そうしたら下がったと。これは開いたというような話を聞いたのは午  
前中ですね。

○質問者 10 時 10 分か 20 分かですね。

( ) ○細野大臣 それくらいの時間だったと思います。

○質問者 それで、それを聞いた後、やはりちょっと。

○細野大臣 開いたのが閉まったとかという話になって、ベント弁というのはずっと開け  
ておけないのか、途中で閉まったりするのがみたいな議論をしたんですよ。

○質問者 その頃は、 [REDACTED] そういう話をされていると。

○細野大臣 そうです。

○質問者 それからずっといて、ようやくそのベントで 14 時半くらいまでに圧力が下がっ  
てきて、どうもベントができたらしいという情報なんかも入ってきたのですか。

○細野大臣 それも入りましたけれども、だから、一回できたと言ったのに、また閉まっ  
たとか言って、開いたとかと言って、本当のところはどうなんだろうなどは思っていたん  
ですよ。

○質問者 その頃の 1 号機に対する注水は、ずっと継続してやられているんだというふう

【取扱い厳重注意】

に認識されていましてか。

○細野大臣 真水が入っていましたよね、途中から。真水が入っているのだけれども、切れるだろうみたいな話があったんですよ。そうしたら、では海水だなという話に当時はなっていたんです。だから海江田大臣はそれを入れる準備もしていたのだけれども水素爆発で入らなくなったんです。それは認識していました。

○質問者 そうすると、東電がと言うよりも、具体的には吉田所長以下が現場において海水注入をするための準備をしているということは御存じだったわけですね。

○細野大臣 知っていました。

○質問者 もう爆発前の段階で。

○細野大臣 はい。知っていました。ただ、武黒さんからの報告で、準備していたのが水素爆発で全部だめになって入らなくなったという話を聞いたんです。その辺の、海水を入れるか、水素がどうかという話までは、余り総理に報告しなかったんですよ。総理が、では7時、6時に海水を入れるというときに、海水の話をも分余り聞いていなかったんだと思うのですけれども、それで、再臨界という話になったんですね。

○質問者 ではその前の、海水注入の準備を爆発前にやられたときは、その前段階で、そういう海水を入れる準備を今からしようと思うけれどもとか、海水を入れようと思うけれどもというような、そんなやり取りは昔総理との間ではなかったと。

○細野大臣 余りそのときはしていなかったですね。あのときは、また与野党の党首会談とかがあったりだとか、いろいろしていたんですよね。総理は総理で、ずっと総理もそれだと神経が参るじゃないですか。そこはやはり我々の仕事だという意識があったんですよね。本当に重要なときは総理の判断を仰ごう、それ以外のところはここでやればいいと思っていましたから、ちよつとその間は減らしていたんですよ。大きな事象がないときは、原災本部もあったので。

○質問者 それで、XXXXXXXXXX 1号機が爆発したことが、これは最初メモで入ったんですか。

○細野大臣 私の秘書官がメモを持ってきたんですよ。こんなことを言っているけれどもどうなんですかと言ったら、情報が入っていませんと。それで愕然としたんですよね。

○質問者 武黒さんたちは、その場におられましたか。

○細野大臣 いました。

○質問者 武黒さんたちは知らないと。

○細野大臣 知らなかった。煙が上がっているらしいというのが初めて、爆発音が聞こえたと次にメモが入って、煙が上がっているとちよつとそういう火事があるかもしれませんみたいな話から始まって、爆発が分からなくて。水素爆発はしないと言っていたから。

○質問者 班目さんもそこにおられたんですか。

○細野大臣 いたと思いますね。いや、ちよつとその時間帯は余り定かではないですけれども。班目さんは、水素爆発はしないと言っていたから。

【取扱い厳重注意】

総理と一緒にサイトに行っていますよね。帰ってきた後、班目さんは下に帰ってきたのかな。[REDACTED] すみませんが定かではありません。

○質問者 その後、爆発、何か異変が生じたということが分かって、5階の方に行かれた。

○細野大臣 戻ったんです。そうです。

○質問者 そのときは、武黒さんたちはどうされていたんですか。

○細野大臣 一緒に上がりました。全員上がりました。

○質問者 一緒に上がってどちらの方に行かれたんですか。

○細野大臣 総理執務室ですね。

○質問者 そこには、菅総理もおられたと。

○細野大臣 はい。いました。

○質問者 そこに集まって、そこでどういう話をされたんですか。その情報がなかなか入ってこないというような。

○細野大臣 この爆発は何かということが分からなかったんですよ。爆発が何かということよりは、爆発が何かと一瞬論争になったんですよ。今から思うものすごく奇異なのですけれども、テロかもしれないみたいな話まで出たんですよ。でもそんなことはもうどうでもよくて、周辺の放射線量が上がっているか上がっていないかの方が大事だったので、そちらを調べると。原因は後から究明しようと言って、本当にそれは緊迫して、基本的に爆発の前と後で変わっていないと聞いてものすごくほっとしたんです。

○質問者 これは、どうやって。

○細野大臣 現場に電話で聞いたんです。

○質問者 現場というのは、どこに。

○細野大臣 サイトです。

○質問者 サイトですか。

○細野大臣 当時、もう電話がつながっていたんだと思うんです。私が電話したのか、東電の本店に電話したのか、いずれにしても、とにかくあらゆる手段でサイトの中の放射線量を、幾つかまだモニタリングポストが生きていましたから、それを調べると言ったら数値もだしか言っていました。前がこうで、後がこれで変わっていないと。大丈夫だと言うので、ではそれで記者会見に行ってくれと言って、それで行ってもらった覚えがあります。

○質問者 建屋に溜まった水素が爆発したのではないかというような話が出てきたというのは、いつ頃になるんですか。原因に近い話になりますけれども。

少なくとも、先ほどの海水を入れる入れないというような話をする 18 時頃の段階では、そういう可能性が高いのではないかというような議論にはなっていたのですか。

○細野大臣 出ていたかもしれませんが。でも、原因の究明というのは全く意味がないんですよ、そういうときって。そういう話はしないでおこうと言ったのです。原因究明をすると必ず誰かが悪いという話になるんですよ。何で分からなかったんだとか。それをやり出すと本当に話が進まないで、何回かそういうことがあったのですけれども、そのと

【取扱い嚴重注意】

きもうやめようと。誰が悪いとか責任がどうか、原因が何かとかというのは後からやればいいのだからかやめようと言って、全部やめてもらったんです。

○質問者 では、その流れとしては。

○細野大臣 多分、最終的にこれは水素爆発だろうと確認したのは、もう海水を入れる入れないのその頃ちょっと1拍置く時間帯があったので、その頃だと思います。

私なんかは、海水がどちらにしても入らないと思っていたから、入れたくてしようがなかったけど、その間は手の施しようがないと思っていたので、ちょっとそのとき手が空いていたのがいたのでどうなんだと聞いたら、いろいろ考えると可能性としてはデロというのはさすがにないだろうし、水素爆発だろうと言って、班目さんも水素爆発だろうと言い出していたので、多分間違いないと思いますという報告はしました。

○質問者 この頃、その爆発の後18時頃から海水を入れる入れないというような話になるその間のところとして、17時39分頃に福島第二原発から半径10キロ圏内と、これまた1Fの後追いのような形になっていますけれども、これはどういう経緯だったのですか。

○細野大臣 これも確かに決めたのは記憶にあるのですがけれども、第二だったので、第一の事象が1日遅れてきているくらいの印象なんですよね。

だから、保安院から報告があって、ではすぐ10キロにと。3キロと10キロだったので、それと類似のケースだということで10キロにしたんです。余り議論しなかったんです。

○質問者 そのときの流れとして、5階に上がられてからは、                    もう一度戻るといふわけではなく。

○細野大臣 いや、戻っていません。ずっと5階にいました。もうその後は、                    は本当に情報を取らなければならないとき以外はほとんど行っていませんので。

○質問者 では、この福島第二原発の話がされているときというのは、これは総理の執務室の中に皆さんおられているときにそういう話をしたのですか。

○細野大臣 この頃は、もう総理の執務室の隣の応接室が、大体もう常時そこで打ち合わせをする形になっていたの、そこですね。

もちろん総理指示なので、最後は総理の判断を仰いでいるとは思いますがけれども、ほとんど議論は第二についてはなかったです。

○質問者 これは保安院の方からそういう申し入れみたいなものがあったのですか。

○細野大臣 そうですね。そこはもう保安院の仕事ですから。

○質問者 その後に、18時25分のところに、今度は第一原発から半径20キロ圏内だということで拡大されているみたいなのですがけれども、これは、ちょうど海水注入の論議をされているさなかにこういう話になったんですかね。

○細野大臣 そうですね。これは、再臨界の可能性があると班目さんが言ったので、再臨界とかまた爆発とかということになった場合に10キロでいいのかというのは、これは私が問題提起をしたんですよ。

そうしたら、10キロよりもうちょっと広い方がいいという話になって20キロになったん

【取扱い厳重注意】

です。

○質問者 これは、例えば15とか30ではなく20なのかというのは、何か指標みたいなものがあつたのですか。

○細野大臣 いや、もう私たちは分からないから最大で何キロだと。最大で危険が及ぶのは何キロだと問いかけて、20キロだという話になったんです。

○質問者 それを聞く相手というのは班目さんとかになるんですか。

○細野大臣 基本的にはそうですね。保安院と班目委員長ですよ。この2者しかいないんですから。

最大だよ、最大で何キロだという話になって、10キロよりは20キロという話になったんです。

○質問者 この拡大というのは、再臨界の可能性がゼロではないという、ニュアンス的にはもう少し強いように受け止められるような言い方であるように認識をされたわけですよね、その当時としては。その班目さんがおっしゃっていることについてですね。

○細野大臣 はい。そうです。

○質問者 そうすると、そういう可能性があるのであれば現状のままではよろしくないのではないかというふうに思われて、そこから最大で言うところのどのくらいなのかとやられたら、班目さんは20というようなことになった。

○細野大臣 20という数字を誰が出したかというところまではちょっと記憶していないのですけれども、20で大丈夫だという話になって、それ以上は大丈夫ですという話で20キロ。常に、最大で何キロだという議論は必ずしていたんですよ。

○質問者 このときは、その場所には菅総理はおられないんですか。

○細野大臣 いました。

○質問者 そこにはおられたと。

○細野大臣 だから、ブレイクするときですよ。6時から再臨界論争があつて、大分技術的な話になって、燃料が固まっていたらどうか、再臨界というのはちょうど水と燃料のバランスが、あんばいがよくないとならないじゃないですか、そういうふうになるのかならないのかとか、ホウ酸を入れているのかとか、そういう議論もしたんですよ。

それで、これはまずいなと思ってブレイクして、私が、ちなみに避難はどうなんだという話もしたんです。だから、そのときは全員いたんです。それで20キロになったんです。

○質問者 そのときは、そういう議論をしているところですから、東電の武黒さんなんかもおられて。

○細野大臣 いたかもしれません。勿論、口は出していませんけれども、そこは、あなたはちょっと出ていてくださいと言うわけにもいかなかったのです。

○質問者 その後、1号機に海水注入の了解ということで、ブレイク後はそれほど何か議論することもなくすんなり決まったということですか。

○細野大臣 そこはないということになったので、では入れようということでゴーを出した

【取扱い嚴重注意】

んです。

○質問者 再臨界の可能性がないということになって、それは班目さんか誰かがそういうふうにはっきりおっしゃったという。

○細野大臣 そこが、ちょっと私も怪しいのですけれども、久木田さんというのが、原子力安全委員長代理でいるんですよ。それで、班目さんはその辺で体力の限界が来ていて、いなくなったのではないかと思うのですよ。そのときに初めて出てきて、これも止めてもらった方がいいですね。

<録音停止 00:17:58>

○質問者 そうしたら、その後の総論的な形になると思うのですけれども、基本的には細野大臣と寺田補佐官、18日の頃なのですから、このお二方が政務でおられて東電側とか保安院の人間なんかもいて。

○細野大臣 いました。勿論、福山副長官も枝野長官も海江田大臣も誰も帰っていないですよ、家には。ただ、もうお分かりになると思うのですけれども、一晩徹夜で緊張していて、二晩目、12日に徹夜して、もうそうすると普通の年齢の人は体力も限界なので、海江田さんなんかもう本当にグロッキー状態だから、とにかく1時間寝てくれという感じであれしてもらって、でも誰か起きていないといけない雰囲気だったから起きていたんですよ。

○質問者 その間も小康状態というか、爆発ほどではないにしても、例えば18日に3号機のHPCIが止まるというようなことになって、また水を入れなければならないと未明からなっていますよね。

○細野大臣 そうです。それはよく覚えています。

○質問者 そうすると、また緊張感が。

○細野大臣 そう。いよいよ3号機が危ないというのは分かってきたわけですよ。さすがに1号機のベントのタイムスケジュールと似ているじゃないですか。なんとか防ぎたかったのですけれども、防げなかったの、それがショックでしたね。

○質問者 その頃というのは、5階の応接室にみんな集まって、東電を中心にして情報を入手して、それに基づいて今後どうするべきかというような話をされている。

○細野大臣 そうです。

○質問者 先ほどのお話の中で、吉田所長と直接電話で相談されたこともあると。これは、電話番号とかはそういうふうにして。

○細野大臣 それがですね、私もそこがどうだったんだろうなと時々思うのですけれども、携帯に入れていたので誰かから教えてもらったんですよ。総理と吉田所長も何度かしゃべっているのですけれども、私にかけて総理につないでいるんですね。2回くらいやっていると思います。私も、そんなにかけていないんですよ。多分14日くらいまでで3回くらいしかかけていない。本当にシビアなときだけかけていたので。

○質問者 向こうから、吉田所長の方からかかってくるということのはあったんですか。



【取扱い厳重注意】

○細野大臣 1回だけ、14日の夕方、2号機の水が入らなかったとき、あのときは多分現場が一番緊迫したんだと思うんですよ。だめかもしれないとかかかってきて、燃料切れだったんですけども、あのときが多分一番危なかったときですね。あのときだけです。

○質問者 吉田所長からかかってきたのは一度だけですか。

○細野大臣 吉田所長からかかってきたのは一度だけです。

それで、これはだめかもしれないと言って。総理の執務室でたまたま菅総理と私2人だったんですよ。何かで私が報告をしていて、そうしたら吉田所長から電話があつて出たらその話だったので、総理も14日は憔悴していたので、しばらく沈黙があつたりして。そうしたら5分か10分くらいしてかかってきて燃料切れだったと。お恥ずかしいですけども、燃料入れて入りましたというので。

○質問者 消防車の燃料が切れていたというときですね。

○細野大臣 そうです。

○質問者 では、その頃、13日からずっと話をされるとときというのは、具体的なオペレーションとして、例えば3号機に恐らく水が当時まだ海から直接取っているという状況ではなかったの、水をどちらに入れるか、3号機に入れるのか2号機に入れるのかとか、そういう具体的なオペレーションについての議論なんかをされているんですか。

○細野大臣 多少しましたね。今思い出しましたけれども、プールみたいに作って、こちらから行ってピットでこちらへ回してとかいうことをやっていたでしょう。説明は受けました。ただ、そこまでいくと我々も手の施しようがないから、何かやれることがあつたら言ってくれと。更にそういう放水車が必要だとか、こういう機材が必要とか、自衛隊が必要とかということを書いて、ちょっと無力感があつたんですよ。13日は。当時いっぱい放水車とか消防車とか入っていると思うのですけれども、ジャックが合わないとか何かそういう話もいっぱいあつたりしてですね。ですから、13日はいたのですけれども余り大したことはできなかったんですよ。

○質問者 少し細かい話になってきますけれども、3月13日は3号機に水を結局9時25分頃から入れ始めているみたいなのですけれども、最初は淡水を入れて、その後で海水に変えているという流れになっていまして、この直接の経緯を書いているのですけれども、どうも■■■■部長が当時、5時とか6時とかその頃なのですけれども、その頃に吉田所長と電話で話をされているみたいで、そのときに、実は、吉田所長はもともとは海水をいきなり入れようとしていたようで、そのラインを作って水を入れようとしているのですが、ただそれを作っている途中でちょうど■■■■さんから電話連絡が入ってきまして、いろいろ防火水槽だとかというのは中越沖地震以降にいっぱい作っているのだから、そういうところから水を取れるんだったら、そちらからやった方がいいんじゃないかというような示唆をもらって、吉田所長からすると、それは官邸にいる■■■■さんからのお話なので、官邸がそういう意向なのだろうと当然受け止めますので、それでチェンジをしてこの9時25分から淡水注入開始という経緯になっているみたいなのですけれども、そういう海水なのか淡水

【取扱い厳重注意】

なにかみみたいな議論をその頃やられていたかどうかというのは。

○細野大臣 少なくとも、もう1号機がそうなっていましたから、淡水、海水の違いというよりは水という認識しかなかったですけれどもね。

ただ、このときかどうかは分かりませんが、海水も結構意外と海から遠いので、なかなかホースがないので、ピットでつなぐというような話はよくしていましたね。水溜めを作っていましたよね。図を書いて、こちらからこうしたらどうこうという説明はしていましたね。

○質問者 海水を入れるというのが、1号機が海水を入れましたとか、3号機は海水を入れましたというときの、このときの海水を入れているというのは直接海から取っているのではなくて、逆洗弁ピットという、本来は水を入れるところではないらしいのですけれども、そこにたまたま津波で水が溜まっていたのがあって。

○細野大臣 そんなことも聞きましたね。

○質問者 そこから取っているというようなことは、後から分かったというわけではなく、もうすぐに、海水注入開始という頃からお分かりでしたか。

○細野大臣 結構報告を受けていたのですけれども、正直に言うとそれは分からないし、現場の地図が明確に頭に入っているわけでもないし、それがどうだという判断も意味もないので、何とか入ってくれというくらいでしたよね。むしろ、私の関心は、その18日は、水素爆発を防ぎたかったから別のチームを作ったりして、チームというか東電に対して何とか防げないのか、方法はないのかと言って、別のチームで検討をしてくれとかという話の方をしていて、海水の話は聞いていたのですけれども、深刻だというのは分かっていたんですが、深刻だからと言って別にやれることはないじゃないですか。だから、私の頭の中にあっただのは、何がやれるか、何が重要かということを判断して、そちらをちゃんと検討してもらおうということがあったので、余り詳しく覚えていません。

○質問者 その水素爆発対策というと、先ほどの建屋にどうやって穴を開けるかとか、水素が溜まらないようにするにはどうすればいいかとか、その辺の検討をしていたということですか。

○細野大臣 していましたね。

○質問者 そこには、東電の人間以外に、例えばプラントメーカーの方とかそういうような方とかは。

○細野大臣 来ていました。東芝の■■■さん。彼が来たのはもうちょっと前ですよ。12とか13。彼は非常に頼りになった。必死で東芝で考えてくれていました。途中で日立も来たんじゃないですかね。人を常駐させていたかどうかは分かりませんが、日立の社長も一回来ましたね。日立も東芝も考えていて、やっていましたね。

○質問者 それは、どなたが呼ばれたのかというのはわかりますか。

○細野大臣 これは総理が呼んだんですね。メーカーの方が詳しいだろうと言って、メーカーを呼べという話になって。その辺の勘はあの人には鋭いんですね。■■■さんがずっと

【取扱い厳重注意】

いました。

○質問者 ■■さんはその後も応接室で議論に加わっていたのですか。

○細野大臣 加わっていました。積極的に加わっていました。むしろ東電の技術者より詳しいなという印象を受けました。何か方法も考えたんですよ、幾つか。

ヒアリングされましたか。

○質問者 ■■さんはしていませんね。

○細野大臣 ■■さんはした方がいいかもしれません。ずっと初めから知っていますから。

○質問者 では、■■さんも途中で、12日、13日の早い時期から来られていたということですね。

○細野大臣 そうだったと思いますね。12日か13日は覚えていませんけれども、官邸にいましたから。

○質問者 武黒さんなんかもずっとそこにおられたということですか。

○細野大臣 ずっといました。武黒さんは帰っていませんでしたね。ずっといましたね。

○質問者 保安院なのですから、保安院のメンバーはいろいろ変わっていった。

○細野大臣 結局ですね、ここもちょっと止めてもらった方がいいですね。

<録音停止 00:28:43>

保安院のユニホームを着てやっていました。総理も、安井さん、こいつがいいと。

○質問者 それが13日頃からずっとその後は。

○細野大臣 安井さんはずっとその後やっていました。

○質問者 東電に行ってから。

○細野大臣 東電に行ってから安井さんでした。

○質問者 今度14日になりますけれども、14日になりますと、3号機が水素爆発を11時01分にしていますが、これは実際、その前の段階からそういう懸念を持っておられたということですね。

○細野大臣 強く持っていました。

○質問者 ただ、有効な、即効性のあるような対策がなかなかできなかったということですね。

○細野大臣 結局、その唯一の方法の穴を開けられなかったし、水素が抜けなかったのもう情けない話なのですから、水を入れてできるだけ水素が出ないようにするしかないということでやっていたんです。ただ、入らなくなっていたから。

○質問者 この爆発を知ったのはどの段階ですか。

○細野大臣 これはもう瞬時に分かりました。映像も出ましたよね、たしか。

○質問者 リアルタイムですね。

○細野大臣 ええ。映像は私、見ていないのですけれども、これはもうすぐ東電も認識していました。予想していたから。

【取扱い厳重注意】

○質問者 現場の現地の方に状況の確認とか、そういうのを直接電話を誰かがやってとかいうのはされたかどうかというのは。

○細野大臣 それはちょっと覚えていないですけども、でももう3号機の水素爆発は予想もできたし、起こったということもはっきりとした共通認識だったから、余り確認する意味はなかったかもしれないですね。

ただ、3号機の水素爆発のあたりから周辺の放射線量が上がってきたので、たしかそうですね、だから、もう本当にこれはまずいと思いました。私がずっと見ていて、これはちょっと本当に制御できないかもしれない、制御不能だと思ったのはこの日ですね。本当にまずいと思いました。この日は。

○質問者 この3号機が爆発して、周辺の線量も上がって、2号機のRCICも明らかに止まった兆候が、水位がどんどん下がっていくということになっていって、今度は2号機もかというような頭になっていきますよね。

○細野大臣 はい。なりました。

○質問者 2号機ですと、当然吉田所長以下も早く水を入れなければならないというふうにお考えになっていたようなのですけれども、当時水を入れるにはサブプレッションチェンバーの圧力や温度が非常に高くなっている、ここにSR弁で蒸気を逃がしていくと上手く凝縮もしないだろうし、そのうち破壊されてしまうと。

○細野大臣 破断するかもしれないと。

○質問者 はい。ということで、ベントラインを何とか早く作らなければならないということ、優先順位としては、まずベントラインを作った上で注水をしようという作戦で人を動かそうとして、当然その注水のラインは作っているのですけれども、減圧まではやらないでベントを何とかしようというような、そんな話があったところ、どうも班目先生と電話で吉田所長が直接やり取りをされているみたいなんです。

○細野大臣 そうなんですか。

○質問者 はい。そこで、官邸側の方の考え方ということで吉田所長は受け止めているのですが、要するに、確かに懸念は分かるけれども、全く凝縮しないわけではないから、それよりも早く、格納容器よりも、そんなことを言っている場合ではなくて、圧力容器の方がむしろもう問題だということで、早く減圧して水を入れるという示唆をいただいているみたいで、それを東電の中では班目方式というふうに名付けて、班目方式で行くのか行かないのかというのをその後議論されているみたいなんです。その基となるような、早く水を入れるべきではないとか、いやいやベントが先だとか、何かそんな話があったかどうか。この14日の2時とか3時頃の昼下がりに頃、どんどん状況が、2号も1号、3号に近付いていっているという情勢のときにですね。そういう御記憶はございますか。

○細野大臣 いや、ちょっとごめんなさい。分からないですね。ただ、班目さんは、メーカーにも一時期おられた方だけでも、テクニカルな部分でそんなに詳しいわけではないとは思っていたんですね、その頃は。初めは、いわゆる原子力の、例えばあの人は流体

【取扱い厳重注意】

が専門ですけれども、そういう論理と言うかそちらの人とエンジニアの技術者がどう違うのか分からなかったんですけど、話していると大体分かるじゃないですか。現場に詳しくて具体的なオペレーションに強い人と理屈の人と。班目さんがこちらの学者だというのはすぐ分かったので、そのことについて班目さんに現場に対して意見させようみたいなことは考えなかったですけどね。

○質問者 14日の、例えば先ほどのお話ですと、夜のまだ早い頃、夕方から夜にかけての頃に、恐らく吉田所長から細野大臣のところを電話をされていると思うのですが、それ以外に、この頃、まだ明るいうちに吉田所長と直接細野大臣がお話になられたことというのはなかったですか。かなりピンチの状況になっているのですけれども。

○細野大臣 そうですね。かけているかもしれません。

私が吉田さんから電話をもらってショックだったのは、それまで何度もピンチがあったんですよね。ピンチのときに状況はどうだというので私がかけている。普通るときはかけないですから。これまで、「いや大丈夫です」と、常に「まだやれる」という返事だった人が、このとき弱気になっていたから、これは本当にだめかもしれないと思ったんですよね。

だから、もしかしたら3号機の爆発の前後とかでかけているかもしれません。ただ、その記憶はないんですよ。そのとき以外は常に、大丈夫だと言った人ですから。

○質問者 ここにちょっと書いてあるのですけれども、計器が正しいかどうかという前提はさて置き、少なくともずっと水位が下がっていて水が全然入らないので、夕方18時過ぎ、18時22分頃にはもう、TAE マイナス3,700ということで燃料が全部出ているという状況になって、その後ダウンスケールしていつているという状況で、彼らも、水を全然入れていなくて何時間も経っているのです、これは完全に燃料が露出したというふうに考えた方がいいと。それだけ露出する間には当然損傷も相当進んでいるだろうというところで、かなりもうまずいというふうなことをどうも吉田所長も考えるようになって、その頃に、次からまたお話が流れになっていくのですけれども、いわゆる彼らが言うところの退避、退避というのは、普通は、所内で、例えばヤードの方で作業をじていて線量が上がってきたので免震重要棟に退避するというようなことをされるみたいなのですが、吉田所長はそのとき、当時、協力企業であるとか若い事務の方だとか、そういう人たちもいっぱい免震重要棟におられたので、この方々を2Fの方に退避させた方がいいのではないか、あるいは、2Fと言わず、どこか構外に退避させた方がいいのではないかというようなことも頭をよぎり始めて、それを本店の方と話をされているみたいなんです。

○細野大臣 何時頃ですか。

○質問者 それは、この18時22分の後の19時とかその頃です。

○細野大臣 私としゃべった後ですね。

○質問者 恐らく、燃料切れだということの話だとすれば、その後でやはり燃料切れでしたというのは19時54、7分の20時ちょっと前の話だと思うのです。

○細野大臣 それより前ですか。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それよりも前の頃からそういう話がちよろっと出始めていて、ただ吉田所長は、それはまだ確実にそれをするというよりも、このまま状況が悪化していけばそれを考えなければいけないから、そういう状況になったときのオペレーションもきちんと考えた方がいいということをお店の方に、そんなことを考える余裕はうちにはないから本店の方で考えてくれというようなことのやり取りがどうもなされているみたいで、そのあたりのごことは吉田所長とは直接は。

○細野大臣 私がしゃべったのは、2回電話していますけれども、両方30秒以内ですから。

○質問者 弱気になったときも、実はみたいなの、そういうものもないですか。

○細野大臣 なかったです。もうちょっと頑張ってみると。とにかくやってみると言って電話を切って、5分か10分経って大丈夫だとかかかってきたから、大丈夫ですかと言ったんですよね。そうしたら大丈夫ですと言ったんですよ。

○質問者 大丈夫ですというのは、弱気の電話のときですか、それともその後の燃料切れの。

○細野大臣 最後のときにです。

○質問者 実際に吉田所長は、直接おっしゃっておられるのは、自分はもうここから出ていくことはないかと思っていると。当時からずっと思っていたと。ただ、若い事務の人間だとか、周りの全員が残っておく必要はないというか、実際には何百人といて、600人くらい人間がみんな廊下やいろんなところで、次に自分たちが何かあるかもしれないからというので控えている人たちがいて、この人たちをどうにかしないと、という思いがだんだん強くなってきているみたいです。要するに、水が入ったといっても、その後また入らないというのをずっと繰り返していってましたので、その思いがどんどん強くなっていくと。

そこで、当然本店側の方もその状況についてはだんだん分かってきますので、少なくとも保安院の方には、具体的には寺坂院長なのですが、清水社長は。

○細野大臣 それは何時頃ですか。

○質問者 これはもう早いんですね。先ほど言った19時台の段階で、まだ本決まりではないのですけれども、そういうようなことも考えていますと。

ただここで、これはあくまで東電側の言い分です。東電側の言い分としては、いわゆる巷で言われているような全員撤退するというようなことは考えていませんと言うんです。どこでどう間違っただけなのか分かりませんが、そんなことは考えていませんと。少なくとも吉田所長はかなり強くおっしゃられるんです。現実には自分はそんなことは全く考えていないと。その後、2号機、4号機が爆発したときもそんなことをしていないじゃないかということをお強く言われるところがありまして、では本店の方もどうかと言うと、本店の方もそのようなお話をされるんです。異口同音に。

○細野大臣 そこは、完全にあれがあったんでしょうね。初め、多分保安院に入ったというのは、私も何となく分かりました。松永次官か誰かが、多分海江田さんに連絡してきているんじゃないですか。恐らくですよ。海江田さんにも直接電話があったはずですよ。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それは清水社長からですか。

○細野大臣 清水社長からです。

私にも電話があったのですけれども、私は、海江田さんが撤退すると言っているけれども絶対に撤退させてはいかぬだろうと言ってたから、私は取らなかつたんです。

○質問者 それは、清水社長から直接ですか。

○細野大臣 ええ。清水社長からですと言って、海江田さんに電話があった後私に電話があったんですよ。同じところにいるので、俺は出ないと言って出なかつたんです。多分それは、総理につないでくれということだったと思うのですけれどもね。海江田さんは完全に撤退すると解釈していましたね。

枝野さんにも連絡があったのでしたか。官房長官にも電話があったんですよ。官房長官もそういうふうにとっていました。

○質問者 それは、海江田さんとは一緒におられるところで、海江田さんに電話がかかってきていたと。

○細野大臣 いや、電話に出るときというのは、みんなの前でしゃべりませんからちょっと席を外すじゃないですか。帰ってきて、そういう話を海江田さんがしていましたね。

○質問者 それは、場所は応接室ですか。

○細野大臣 はい。そうです。応接室の外に出て電話をしたかなんかだと思います。

○質問者 そのとき枝野さんはどちらにおられたんですか。

○細野大臣 ちょっとそれは。でも、官房長官室というのが5階の同じフロアなんです。隣の部屋なんです。枝野長官も、隣の部屋の官房長官室に入っていたか、もしくはこちらの応接室にいたか、どちらかにしかいませんから。

○質問者 そのときのイメージ、海江田大臣からお聞きになったときの印象としては、吉田所長以下全員がもう手を引くというような印象がございましたか。

○細野大臣 そうでしたね。私は直接話していないので、海江田さんと枝野さんから聞いた情報はそういう話だったんです。

○質問者 少なくとも海江田さんと枝野さんはそういう認識でしゃべっておられたと。

○細野大臣 お話になっていたと思います。

○質問者 東電としても、一部残して撤退するならわざわざそんなことを言うてくる必要はないのではないですか。

○質問者 そうしたら、全員が撤退をするというお話になられて、その頃、武黒さんとか  
■さんはどちらにおられたんですか。

○細野大臣 いました、そこに。

○質問者 その場におられましたか。

○細野大臣 いました。それで、これはもう15日になってからなのですからけれども、これは何時頃なのか、最後に総理のところまで話し合っているのが3時とか3時20分とかその辺なのですからけれども、その前に、撤退するかどうかという話を総理を除いてしているんですよ。

【取扱い厳重注意】

ね。そのときに武黒さんも■■■さんも、もうだめだと、そういう話をしていたんですよね。

○質問者 だめだというのは。

○細野大臣 撤退するしかない。手はない。

○質問者 武黒さんたちは、そのときは個人的なことというよりも、要するに個人的なそれを枝野官房長官たちから初めて聞いた感じだったのか、あるいは東電の命を受けてというか東電から。

○細野大臣 それは分かりません。分からないですけれども、今でも覚えているのは、武黒さんがしょんぼりしてしまって、もう何もできませんみたいな話をしたから、私は、ちょっと申し訳なかったけれどもみんなの前で「あんた、責任者だろ。しょんぼりしていないで何か考えろ」と言った覚えがあります。あのとき班目さんが、もう手はありませんから撤退やむなしと言ったんです。一番の専門家だと思っていたから、彼がそういうことを言ったことには本当に愕然として。

○質問者 班目さんがそういうふうにおっしゃられたんですか。

○細野大臣 言いましたね。総理がその後、撤退はあり得ないと。「撤退はあり得ない。そうだろう」と言ったら、撤退はありませんと言ったので、また翻したなこの人と思ったんですよ。

○質問者 そのときは、まだ清水社長はおられないところで。

○細野大臣 いません。

それで、撤退をするかしないかで、するならどういふことを考えなければいけないのかというのを考えよう。それと並行して、撤退をしない、何とかなる方法を技術陣、専門家は考えてくれ。撤退するならどうかというのは、我々政治家が考えるしかないじゃないですか。ちょっと一瞬議論はしたんです。でも、やはりもう判断をした方がいいというので総理の部屋に入って、撤退するかどうかという御前会議みたいなものをしたんです。そうしたら瞬時に、撤退なんてあり得ないだろうという話になったんです。

だから、武黒さん、■■■さんはそのときどう思っていたかですよね。本店と現場がちょっと意思が上手くいっていなかった可能性もあるし、本店と武黒さんが連絡が上手くできていなかった可能性もあると思います。

ただ、少なくともあのとき武黒さん、■■■さんは、もう撤退やむなしと思っていたと思います。

○質問者 それは、完全にもう全員が引き揚げるという。

○細野大臣 手はないということですからね。全員かどうかは分かりませんよ。ただ、少なくとももう手はない。

○質問者 今の現状のまま、そこで全員が残ってみんなが対処するというような。

○細野大臣 ええ。

○質問者 ただ、少なくとも枝野官房長官だとか海江田大臣においては、東電が全員持ち場を離れるという前提でお話をずっとされていたということですか。



【取扱い厳重注意】

○細野大臣 そうですね。全員というのは、人っ子一人残らずということかどうかというところまでは話をしていませんよ。ただ、要するにこれ以上何もすることはできない、できないので、みんなは言わないけれども、我々の共通した意識は、少なくともそういうふうに感じた我々の意識は、このまま行ったらあそこにいる人の命が危ないかもしれない。残れと言うのは、場合によっては死ねということにもなるかもしれないと思ったので、みんな躊躇したんですよ。

○質問者 では、吉田所長が頭に描いていたというふうに今おっしゃられていることというのは、実際に3月15日の明け方以降に行われた姿で、要するにあのときに行ったことというのは、50人くらい残して。

○細野大臣 50人くらい残してあとは引いたという。

○質問者 それで、とにかく当直は全員残れという形で、持ち場を離れると1号から2号、3号と全部だめになって、4、5も全部だめになるので、そんなことをすれば東日本全部なくなると吉田所長もずっと思っていたとおっしゃるんです。

○細野大臣 吉田さんがそう言っているのは、私も信じます。そういう人ですから。信じますけれども、そうはとっていなかったですね。

武黒さんと■■■さんがどう思っていたかというのは、ちょっと確認する必要があるかもしれないですね。

○質問者 少なくとも、武黒さんと■■■さんは少しあきらめムードのような、そういう雰囲気だった。

○細野大臣 あきらめムードではなくて、完全に肩を落としてうなだれていたんですから。そのときの姿は鮮明に覚えています。だから私が武黒さんを面罵したというか、今から思えば失礼だったかもしれないですけれども、何か考えると。我々ががっかりするわけにはいかないじゃないですか。

○質問者 武黒さんたちは、それでどうされたんですか。その後も何か意見を言うこともなくずっと。

○細野大臣 そうですね。だから、その後もう余り間髪入れずに総理に判断をしてもらって、清水社長を呼べと。「俺は東電に行く」という話で、すぐに呼んで、清水社長は割とすぐに来ましたから、そこで、東電に乗りこむと言って、いいなと言ったら、わかりましたと言って、そのままもう東電に戻りましたからね。2人も帰ったし、私は先遣隊で行かされて、4時頃ですか、行って、今から総理が来るからちょっと準備してくれと言ったんです。

○質問者 その清水社長が来られたとき、そういう撤退をするのかしないのかということについて菅総理の方から確認はされているかどうかというのは。

○細野大臣 何かそんなやり取りはしていませんね。ですから、撤退は考えていませんみたいなことを言っていましたね。目の前で総理が目をひんむいて言っていましたからね。

「いや、撤退します」とはとても言える雰囲気ではなかったから、撤退しないことにした

【取扱い厳重注意】

んだなと思いましたがけれども。

○質問者 その頃、武黒さんたちは、結局清水社長が来られる前に菅総理と会われているのですか。

○細野大臣 みんなで入っていますから。でも、撤退のときはいなかったかもしれない。最後入るときは政府関係者だけにしたのかもしれない。ちょっと覚えていないんですよ。

○質問者 清水社長が来られたときにおられたかどうかというのは。

○細野大臣 そのときはいたと思いますね。

○質問者 武黒さんたちもですか。

○細野大臣 ええ。

このときは入っていないかもしれません。東電は入っていないかもしれません、撤退の判断のときは、政務でやっていたときは。

○質問者 その前の段階で武黒さんたちから話を聞いて、何もその手だてを言わないと。それで、その後政務の方だけで総理のところに行かれて、清水社長を呼ぶということになったというときも、これももう政務の方だけですか。保安院とかそういう役所の関係の方なんかは。

○細野大臣 どうだったんでしょうね。短い会談だったんですよ。本当に10分か15分くらい。

○質問者 それで、もうそのままみんなで行かれたと。

○細野大臣 いや、総理が移動するときというのは、事前にSPとかも含めてやはり若干準備が必要なんです。1時間くらいやはり見るんですよ。いきなり総理が東電に行くのもえらいことだから、先遣隊で行けという話になって、それで私がその後すぐ、多分4時半とかくらいに東電にまず1人で乗り込んで、それで席を作ってもらったりして、総理が5時半頃ですか。1時間くらいですね、ちょうど。

○質問者 その後、統合本部が立ち上がって行って、より直接的に、テレビ会議システムもそこにあったと思うのですけれども、それがあつたこと自体はその前から御存じでしたが。

○細野大臣 知っていましたね。情報がそこにはあるらしいと。

○質問者 それはどの段階で、誰から。武黒さんたちから。

○細野大臣 それしかないですからね。

どういう仕組みかなんてことは分かりませんでしたが、意外と設備は整っているなと思ったんですよ。行って見て。

○質問者 そこまでの、14日の夜、最後に吉田さんとお話をされて、その後撤退というような話なんかいろいろと入ってくると。最終的に武黒さんたちに言ってもちょっと何も手だてを考えないというような、その間のどこかなんかで、吉田所長と直接話をした方がいいのではないとか、そんな感じの話にはならなかったんですか。

○細野大臣 そこが私も定かではなくて、まだやれるなみたいな電話を総理が夜中に清水

【取扱い厳重注意】

社長がいるときにしているかしていないか、そこはちょっとごめんなさい。総理から、大分経ってから、もう辞めた後か何か「したかな」とか言われて、本人も記憶をたどったみたいで、覚えていないんですよ。

○質問者 細野大臣が直接はされた記憶はないですかね。

○細野大臣 総理から言われて、撤退するしないのときに吉田所長にかけているのかもしれないのですけれども、自分で能動的に吉田所長としゃべりたいと思っただけではないです。できるだけかけないようにしていたので。そんなことで手を煩わせたくなかったし。

○質問者 そうすると、現場の方が実際にどう考えているかということについて、例えば吉田さんと直接話したり、あるいは菅総理から吉田所長に確認したけれどもこうだったよとか、そういうことは記憶として、未明頃の中ではちょっとないですかね。

○細野大臣 本当に私も寝ていないんですよ。1時間くらいどこかで、18日くらいに寝ているのですけれども、それ以来もう3徹か4徹なんですよ。本当に人生で初めての緊張感の中でやっていたので、そこは覚えていないんですよ。そう言われればかけているような気もするんですよ。

ただ、例えば、事前に東電から電話が入って撤退騒動があるときに、どうなんですか吉田さんというふうにはかけていません。かけているとすれば、撤退しないと決めて、その後か何か総理に言われて確認をさせられたか何かでかけている電話があるかないかです。そこは定かではないのですけれども、逆に言うと、結構恐ろしいじゃないですか、そこは。私もずっと、会議の撤退騒動のときの会議もずっと出ていたのですけれども、その会議だけは言葉を一言も発していないんですよ。余りに大きな話なので、自分でもちょっとそういう判断ができなくて、そのほかの会議では、私は生意気ながら他の大臣を制御しても「俺はこう思う」と割と言っていたのですけれども、人の話を遮ったりとかしてしゃべっていたのですけれども、この会議だけは結構やっただけなんですけれどもしゃべってないんですよ。

だから、吉田さんに確認するのも一瞬確かに考えたので、今、記憶がちょっとあれなんですけれども、確認はできなかったんですよ。余りに大きな判断で。判断能力は薄れていたけれども、撤退したらそれはえらいことになるということは分かっていた。一方で、みんないろよと言って、ここで亡くなったりしたら、これは本当に自分でどうなんだろうかと、責任取れるんだろうかと逡巡はしていたんです。

事態が一応完全に収拾して海江田さんが大臣を辞めた後、海江田さんとさして飯を食べたんですけれども、そのときのいろいろな思い出話をしている、海江田さんに「海江田さんはあのとき何を考えていましたか」と言ったら、全く同じことを考えていたと。

だから、みんなそれを考えていたと思います。だから、本当に真面目にそうとっていたんですよ。

○質問者 それで、実際にその後統合本部ができて、3月の15日からはずっとあちらの方

【取扱い厳重注意】

に細野大臣も行かれたわけですね。ちょうどその行かれた後間もなくして、2号機付近で何か異音というか、爆発騒ぎみたいな形になって、4号機の方も損傷が確認された。それはもう向こうにいるときに。

○細野大臣 はい。そうです。朝、6、7時頃ですよ。

○質問者 そこでやり取りを、吉田所長は恐らく免震重要棟の方で情報が入ってきて、その確認をしたりするやり取りはテレビ会議システムを見れば直接入ってくると思うのですが、それは全部テレビ会議システムの画面を見て把握されていたんですか。

○細野大臣 吉田所長がああとき、撤退させてくれ、一部を残してという話をしていましたよね。それを私は直接聞いていないんですよ。東電の中に、オペレーションルームのある大きな部屋があって、官邸の人間が、政府の関係者が詰める小さな部屋の一つ空けてもらったんですよ。初めは、私は総理と一緒にそこにいたんですよ。朝方、総理が閣議で官邸に帰る前は、寺田補佐官が中において、寺田補佐官が聞いているみたいです。私はそれを直接聞いていないんですよ。ただ、2号機のサブプレッションチェンバーが破断したのではないとか、4号機もどうも爆発したとかそんな話は、結果は聞いていましたけれども、吉田さんが60人残してみたいな話をしているのは、そのときは直接は聞いていないです。

ただ、そのときは、14日までとは、認識の共有という意味では情報量が全く違うから、東電本社にいれば全部情報が入るじゃないですか。ですから、そこはもう、そのことがどういう意味なのかということも含めて、情報の齟齬はなかったのもそれまでとは全然違う認識で受け止めてはいたんですよ。

○質問者 それで、その日の午前中に福島第一原発について、また避難区域を今度は20から30を屋内退避という形、避難ではなくて屋内退避ということでされておられるようですが、この意思決定をされる時というのは。

○細野大臣 このときは、私はもう東電にいましたから、これは加わっていないですね。

○質問者 これは官邸の方でされていると。

○細野大臣 官邸でやっているんだと思います。海江田大臣もこの日は火曜日なので閣議があったので、もう8時半頃にはいなくなっているのではないかと。9時半から閣議で。

15日は、実は私1人になったんですよ、政務は。寺田補佐官も総理のサポートで帰ったので。ですから、この11時は私は官邸にいないので、この判断は関わっていないです。

○質問者 その日ずっと東電の方におられたんですか。

○細野大臣 いや、一回総理に報告に行かなければと思って夕方帰りました。ちょっと覚えていないのですが、多分、また戻ってきたのが7時とかですから、5時とかその辺に一回官邸に帰ったんだと思います。それで報告をして、そしてもう一回戻ってきました。

○質問者 東電の方にですか。

○細野大臣 はい。

○質問者 それから、もう東電にずっと夜中もおられるんですか。一旦家の方にお戻りに

【取扱い厳重注意】

なられるとか。

○細野大臣 家に初めて帰ったのが、記録がないのですけれども、16日か17日に一回、余りにちょっと、服を一度も変えてなかったのでシャワーだけ浴びに帰ったんですよね。これが、15なのか16なのか分からないのですけれども、シャワーだけ浴びてそのまま。

もうちょっと前なのか。初めて家に帰ったのは、シャワーは一回浴びに帰っているのですけれども、寝に帰ったのは8月の15、16、17、この辺だと思いますけれども、そのときまでは、一回シャワーに帰っただけで帰ってはいなかった。だから、ずっと東電にいました。夜も、そのときから一瞬寝に、あのときくらいか。岡さんはいなかったですか。

○岡秘書官 僕は、しばらくしてから派遣されます。

○細野大臣 政務は誰もいなくなるのが非常にまずいと思ったので、途中から長島さんたちがちょっと手伝ってくれて、夜中の番をやってもらったんですよ。それで帰れるようになったんです。

○質問者 分かりました。では、一応ここで区切りで。

○質問者 3時間で当初申し上げて、実はまだ相当お聞きしなくてはいけないことがあって。

○細野大臣 何回もできないので、私は体力は全然大丈夫なので、皆さんお帰りの時間とかあるでしょうから、それでよければもうちょっといすけれども。

○質問者 いいですか。

○細野大臣 いいですよ、私は。区切りまでやっていただいて。もう一回くらいやる必要があれば。ただ、これを何回もということになるとちょっとなかなか時間を取れないかもしれないので。

○質問者 避難の関係で先ほどの話に補足して何点かお聞きしたいのですけれども、最初第一原発から半径3キロに避難指示、3月11日21時23分のものなのですが、これは、もし覚えていらっしゃるのならなのですが、3キロという数字が決まったやり取りの根拠とかは覚えていらっしゃいますか。

○細野大臣 このときは、まだ水が入ると思っていたんですよ。まさか、本当に水が全く入らなくなって、ベントの話はしていたかもしれませんが、こんなことになるとは思っていませんでしたよ。大変なことになるから何とかしなければいけないという意識だったんですよ。念のために3キロでしたね、このときは。

○質問者 この辺はやはり、班目委員長とかがその根拠を説明すると。

○細野大臣 班目委員長と保安院以外は判断できませんからね。どれくらい危険性があるかということは。班目委員長もそういう意味では本当に大変だったと思うんですよ。気の毒だったのは、一番詳しいとされていたから、彼が全部判断しなければならなかったもので、そこはちょっと割り引いて考えないと気の毒だとは思いますが。

○質問者 次に、12日の明け方5時44分になって、10キロに拡大しているのですけれども、このときの10キロにした根拠とか意思決定というのは覚えていらっしゃいますか。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 これは、ですからベントができなかったときですよ。ですから、ベントができなかったらそれこそ外部に放射性物質が出る可能性が高まった、現実的なものになってきたという判断です。

○質問者 この10キロのときは、[REDACTED] 5階でやっていたという可能性というのがありますか。

○細野大臣 この判断だけ5階に上がって判断しているかもしれませんね。

○質問者 それはあり得るということ。

○細野大臣 あり得ます。総理がいないですから、地下には、もしくは、総理が地下に来ていたというのが、早い段階で私が記憶をたどったときの、これちょっと全部たどったんですけれども、割とずっとこの日は下にいたんですよ。多分地下だと思いますけれども、絶対の自信はありません。

○質問者 分かりました。

それから、第二原発10キロが12日の5時30分に出ていて、先ほどのお話ですと保安院から10キロという申し出があったということなのですけれども、それは、5階に集まっていた平岡次長から10キロという話が出たのか、それとも別の保安院の方から10キロという申し出が、官邸5階の方に上がってきたということなのですか。

○細野大臣 1号機と、第一原発と類似の事象、後を追っているということくらいで、このときはもう水素爆発していましたから、2号機の方が途中から挟まったのは覚えているんですけれども、そんなに議論もしていないので、誰の発議だったのかとか覚えていないですね。

○質問者 そうですか。念のため2Fもという感じだったんですか。

○細野大臣 いや、2Fは2Fで多分深刻だったんですよ、あのとき。水がちょっと入らなかつたりとか、あそこも相当大変な状況でやっていましたから。後から聞いたらですね。念のためということではなかったと思います。10キロ圏内にしたんですから。

○質問者 その後、1Fの方を20キロに拡大したのは、先ほどのお話ですと再臨界の可能性ということで、一旦ブレイクする前に決まったということですが、そうすると大体6時25分に出ているのですが、もう本当にぎりぎりですべて決まって、すぐに退出というような流れで。

○細野大臣 そこでちょっと相談したんですよ。ですから、多分話し合いをしているのは、18時から15分か20分くらいで、話がずっと細部に入ってきたのでブレイクしようと言って、でも避難はどうなんだという話をしてから、多分5分、10分くらいは話していると思うんですよ。距離を決めなければならないので、やはりやり取りしないと話は成立しませんからね。

ただ、短時間で決めたいと思います。実際に、再臨界もあつたけれども明らかに事象がエスカレートしていたし、本当に10キロで大丈夫かという雰囲気はあつたんですよ。第一原発と第二原発は明らかに事象の進展が違いますからね。第二でも10キロで、第一が

【取扱い嚴重注意】

本当に10キロでいいのかという疑問は持っていましたね。

○質問者 もし御記憶があればなのですが、このとき、5時39分に2F10キロは出ているのですが、2Fも20キロにした方がいいのではないかというような話が出て、そのときに危機管理監の方から、2Fはまだ1Fほど深刻な状況ではないし、20キロになるとオペレーションが相当また大変なことになってくるので、一旦ここは10キロのままでいいのではないかというような発言があったという話があるのですが、覚えていらっしゃいますか。

○細野大臣 あったかもしれませんね。常に、危機管理監は避難をさせなければならなかったから、現実的に可能かどうかという意見は言う立場だったんですよ。彼は、それは事態を小さくしようということと言ったわけではなくて、現実的に避難させられるかという判断はしていた可能性はありますね。

○質問者 基本的に一連の官邸の5階で決めていたこの避難の指示の意思決定のところには危機管理監はいらっちゃって、避難実施の実現可能性の観点からの御発言があったということなのでしょうか。

○細野大臣 そうですね。危機管理監はそんなに出しゃばって言うタイプの人ではないので、基本的には他の判断を尊重しつつ、最終で例えば10キロとか20キロとか決まった場合に、それはどれくらいでやれるかとか、現実的に可能かどうかみたいなことで意見は言っていたような記憶がありますけれども、そこからは全部任せたんですよ。

○質問者 例えば、避難するとしたときに、交通手段を準備しなくては行けませんよとか、どこに避難するか予め決めておかないと混乱しますよとか、そういう話というのは、この避難指示する会議の中で出ていましたか。

○細野大臣 伊藤危機管理監から、そういうことが大変なんだということは言っていましたよね。まさにそういう話が、どうやって移動するかとか、病院もあるとか、老人ホームもあるとか。

○質問者 それは、今の流れの中で言うと、このときに言っていたとか、そういう御記憶はございますか。

○細野大臣 ないですね。私の頭が炉の方に完全に行っていたので、もしかしたら多少出ているのかもしれないのですが、そこからはちゃんと議論してやってくれと。そのためにあの部隊があるわけですよ。そういう意識で、自分の中ではっきり切り分けていたんですよ。これは、今から思うとちょっと甘かったなとは思っていますけれども。

○質問者 ちょっと飛ぶんですけども、計画的避難区域と緊急時避難準備区域の検討をして、その後、細野大臣の方が現場の地元自治体との調整に伺われていたというふうにお聞きしているのですが、実際に行かれた市町村の方は。

○細野大臣 それは一回だけなんです。私が行ったのは、3月のたしか。

○岡秘書官 4月10日ですね。

【取扱い厳重注意】

○細野大臣 4月10日ですか。

これは、3月の28日に久しぶりに私は官邸の会議に呼ばれたんです。官邸には時々行っていたのですけれども、それは全部総理に報告するために行っていて、3月15日からは、官邸の中で多分いろいろ会議をやっていたと思うのですけれども、一切入ってないんですね。3月28日に初めて呼ばれて、それで SPEEDI のデータを初めて見たんですよ。それで、北西の方に行っているというのが出てきて、それを見て、これは原子力安全委員会が持ってきたんですけれども、初めになぜか私のところに説明に来て、すぐ避難した方がいいと言ってきたので、私もすぐ避難した方がいいと言って。それで、岡さんはいたんですよ。

○岡秘書官 私はいました。最初に補佐官室に委員の方がいらして、女性の委員がとにかくまじりを決して、大変なんですと補佐官に申し上げて、ではすぐに大変だから行こうと官房長官室にその足でもう行って、という感じですね。

○細野大臣 それで避難させるべきだという話をしたのだけれども、いや待てという話になって、誰からともなくですね。避難してそれは大変だったというのもあるし、あとは、ちょっと28日だとプールの水が入るようになって落ち着いてきていたので、ちゃんと自治体と話をしてやらなければいけないということになって、飯館村の菅野さんはなかなか簡単に避難するという感じではなかったんですよ。それで、説明に行くから、今原子炉が、発電所の状態がどうなのかおまえも説明せよと言われて、10日にこれは松下副大臣と一緒に行くことになったんです。このとき会ったのは、県庁で飯館村長、議長、ほかに、川俣町長、南相馬市長、3人ですね。

○岡秘書官 県庁ではなく県の関連施設です。

○質問者 自治会館ですね。

○細野大臣 ここは本当に難しい判断だったと思うんですよ。私は避難しろと言ったけれども、果たしてあのおとき避難した方がよかったかよくなかったかはすごく今でも難しいと思っていて、飯館村は1か月避難しなかったんですよ。それで、確かに受けた放射線量は若干上がったのだけれども、逆に避難はみんな近隣にしているんですよ。だから、飯館村長はいつか帰ってこられると言っていて、確かにみんな結構つながりを持って生活をしているんですよ。あのおとき逃げるとやっていたら本当にみんなてんでんばらばらに逃げたと思うんですよ。でも、被曝線量は少なかったと。

私は、28日はまだ緊急事態だと思っていたので、国が強制的に、村長が何と言っても逃げると言った方がいいと28日には確信を持って思っていて、官房長官にも強く言ったんです。

○質問者 結局、3月28日の SPEEDI の結果だけで避難を判断しなかった理由というのは、細野大臣は詳しくは。

○細野大臣 私は、このときの会議では最後までいましたか。

○岡秘書官 細野大臣が、まじりを決した女性委員とともに官房長官の部屋に行って、



【取扱い厳重注意】

かなり厳しい口調で、私が補佐官というのはこんなに偉いんだと思うくらいに、びっくりするくらいに官房長官に進言して、わらわらと危機管理監だとか秘書官だとかも集まってきて、結局最後それは官房長官が預かるということで。

○細野大臣 そうそう、私はもう、28日がまだそんな落ち着いていなかったから、一刻も早く東電に帰りたかったんですよね。それがずっと30分くらいああでもないこうでもないと小田原評定みたいになってしまったので、任せるからと言って出たんです。

○岡秘書官 そうしたら夕刻くらいに、こんな感じになりましたという結果だけが下りてきて。

○細野大臣 それで、あのときに示された放射線量が、裸で外で1日いたら浴びるみたいな数値だから、家の中にいて服を着ているのだからというのでちゃんと計れという話になったという報告を聞いて、帰ってきてから大丈夫かなど。

○岡秘書官 そうですね。大臣はちょっと違和感を覚えつつも。

○細野大臣 それはそれで、全部はできないから、それは任せるしかないなど。

○岡秘書官 あのときは、たまたま細野大臣のところにその話が持ち込まれたから、トリガーを引いただけで、避難は枝野さんと副長官が担当して、炉の方は細野大臣というすみ分けができていましたから。

○細野大臣 枝野大臣と私と、そういうすみ分けがはっきりできていたんです。

○質問者 このとき細野大臣のところに安全委員会が上げてきた理由というのは、もう安全委員会の方が細野大臣に御説明したいということですか。

○細野大臣 東電の方に安全委員会も、班目委員長も当時は来ていて、日常的な接点が私と一番多かったんだと思うんですよ。それで補佐官室に来たんですよ。

○岡秘書官 先方が大事な報告があったので補佐官室に集まったんです。

○細野大臣 この4月10日に福島に入った以外は、ずっと行っていませんでした。私は、初めて1Fに入ったのは5月ですけども、それ以外は、地元は一回も回っていないので、そのときから多分、松下副大臣と福山副長官が地元の自治体の窓口をやっていて、ずっと飯館村とか、それこそ南相馬市とか市長さんたちとやり取りをするようになったんだと思います。

○質問者 この4月10日に細野大臣が行かれたのは、あくまで炉の状況を説明するという趣旨で行かれたということですよ。

○細野大臣 はい。そうですね。

○質問者 このとき、差し支えなければなのですが、飯館、川俣、南相馬とその避難の話をしたときに、反応というのは。

○細野大臣 いや、もう強烈でしたよ。絶対避難しないと。飯館村なんか、この村をどうやって守ってきた、までいの村と言って写真集を見せてもらったり、絶対守りたいんだと。やはりこちらにも気迫に押された部分もありましたよね。

川俣町長は、川俣は一部だったんですよ、本当に避難範囲になっているのは、本当にそ

【取扱い厳重注意】

うなのかと。こんなわずかなところで。この線量はどこでどうなんだみたいなことを、初めは穏やかな顔で話していたんだけど、避難の話になった途端顔色が変わって激しかったです。桜井さんは若干色合いの違う人なので、桜井さんのところはどこかと言うと、もう屋内退避になっていたから、避難というよりは屋内退避の問題点を聞くという感じだったんですよ。そこだけちょっと違ったんですよ。

○質問者 結局飯館は、その後また松下さんとか福山さんのところで調整していったということですか。

○細野大臣 そうです。その前もやっていたんだと思います。飯館村長とは、割ともう話があるいろいろな上で会っているという感じですね。私は初対面だったんですけども。

○質問者 分かりました。ありがとうございました。

○質問者 ここから私の方から聞かせていただきたいと思います。

まず統合本部について若干補足的に聞かせていただきたいのですが、統合本部を設置するという話が出てきたのは、総理と清水社長とのやり取りで急に出てきたのですか。

○細野大臣 ここもちょっと思い込みが入っているかもしれないんですけども、清水社長を呼べと言ったんですね。御前会議みたいなものの最後か何かに。今から東電に行くという所で言っていたような記憶があるんですよ。

○質問者 その後、東電に行かれて、総理を本部長とし、事務局長ということで細野大臣が行かれることになったりとか、そういった調整というのでしょうか、打診というのは総理から話が事前にあったのでしょうか。

○細野大臣 いや、全く。それで、官邸に戻る前だったと思いますけれども、私に対して、ほかはみんな閣議があったりしますから、ここにいます。本部長は自分だと言って、海江田さんが副本部長で、ではその一番実務的な事務局長かなみたいかなというか。

○質問者 その後、3月27日から幾つかプロジェクトチームというのが立ち上がって個別論点について対応がなされていくのですけれども、このプロジェクトチームの立ち上げについて細野大臣の方で関与をされた部分とかはございますでしょうか。

○細野大臣 はい。これは、その前からやっていたんじゃないですかね。

○岡秘書官 これは僕の記憶なのですが、基本的には細野大臣が完全にそのときにはもう全体を仕切っていたので。

○細野大臣 そうだ、これは私が言ったんです。

○岡秘書官 それで目米のものに符合させるような形で。

○細野大臣

○岡秘書官

○細野大臣

○岡秘書官